



第29号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447-0087：TEL. 0566-41-8522
 ：FAX. 0566-41-7761



碧南市制六十周年記念事業
観月の会 谷川俊太郎 谷川賢作 「詩とピアノのコンサート」

平成二十年九月十三日。無我苑瞑想回廊前の中庭において、碧南市制六十周年を記念したイベント、観月の会を開催しました。

昨年度の二胡奏者張照翔氏に引き続き、今年度は詩人谷川俊太郎氏、ピアノ演奏家谷川賢作氏親子をお招きしました。また、常滑市を拠点に俊太郎氏の詩の朗読をしている「かつばかつばらったかい」をお招きしました。あいにくの曇り空で、途中まで月は見えませんでした。ライトアップされた瞑想回廊中庭は幻想的な雰囲気にも包まれていました。その中で約三百五十名の参加者が、谷川親子による詩とピアノの共演を楽しみました。

参加者の声

「観月の会」にて

小林玲子

今宵は私にとつて、流行の表現を借りれば、生まれてから一番楽しい観月会であった。

無我苑瞑想回廊の中庭の竹林が、舞台装置の背景となつて、谷川俊太郎、賢作父子共演に、幽玄な趣を添えた。

「このロケーションなら、楽譜が無くてもいくらでも弾ける」と、賢作氏は何度も口にされ、弾む音がピアノから流れ出た。

私の住む西尾市には、ゲンジボタルの里があり、山を背景に竹林の闇の奥から、湧くように流れる光の乱舞には心を奪われるが、今宵の竹林は、照明に浮かび上がり、目の前にゆつたりそよぐ様は、設けられた舞台の背景として見事である。

この会の前に、常滑の「かつばかつばらったかい」の朗読があり、その折、会員の朗読された「シヤガールと木の葉」の詩の一節に、
 /ヒトの心と手が生み出したものと/自然が生み出したもの/シヤガールは美しい/クヌギの葉も美しい/

という件があるが、生憎の曇り空で月は出ていなくても、夜のしじまを包む大気や、人の気配を知らずげに鳴く虫の音が、詩人に呼応して、深く、楽しく心に響く。

自然と人為の感応。人の発することば、人の奏でるピアノが、狭い空間ながら、自然と融け合い、聴く者の心も天空に向かって、ほどけていくような開放感に満たされた。

「ことば」である詩は、本来声に出して読まれるべきだが、氏の詩は殊に耳に快い。

少しお疲れで、少しお歳も加わった筈だが、瞬時に反応し、めりはりのある朗読はすばらしい。ご本人は「演じないこと」と、質問者に応えておられたが、どうしてどうして、なかなかの役者である。

様々に変化する詩体も、やはり谷川俊太郎の詩であるという、一本の変わらない心ばえで書かれていて、「いまは生きていること」の証しとしての詩の心が、聴衆の体に染み透る。「幸せに生まれ、幸せに生き、幸せに還る」ということばは、人の世界だけでない、宇宙の根元まで遡る思想である。

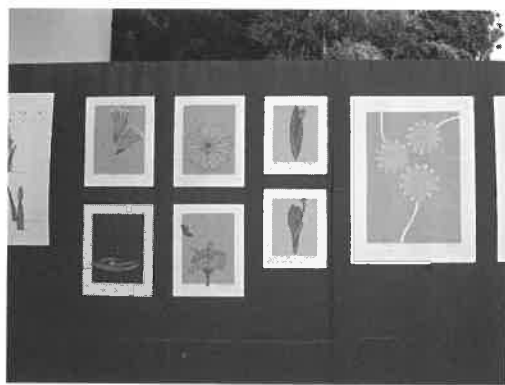
たつぷり三時間半の、詩と音楽の宴がはねて、「じゃあね」(「空に小鳥がいなくなった日」と呟いて私は空を見上げた。雲に隠れていた満月が、いつのまにか、朧に、ひっそりと、屋根の端にかかっていた。



かつばかつばらったかいとの朗読に臨む谷川俊太郎氏

瞑想回廊第三十回企画展示

「高北幸矢グラフィック展 増殖体都市」



七月二十九日から九月二十八日にかけて無我苑瞑想回廊において、「高北幸矢グラフィック展 増殖体都市」を開催しました。高北氏は、都市のコンクリートの割目から芽吹く雑草や、ゴミの中に見つけた小さな虫などから感じるたくましい生命力を「都市の増殖体」と名付け、作品のモチーフにしています。今回のグラフィック展では、ポスターなど七十点を瞑想回廊全体に展示し、大勢の方にご覧頂きました。また、今年度二回目となる第三十一回瞑想回廊企画展が来年一月から開催されます。県内を中心に活躍されている渡辺英司氏の作品を展示する予定ですので、是非ご来苑ください。

「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を終えて

平成二十年度「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を六月八日に開催しましたところ、一般の部では八十五名、小中学生の部では二千六百九十名の方にご投句いただきました。この「にしばた哲学の小径俳句 i n g」は、哲学たいけん村無我苑から愛知県最大の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある「花しようぶ園」や、蓮如上人ゆかりの「応仁寺」を巡る「哲学の小径」を散策していただき、自由に五七五を詠んでいただくイベントです。投句いただいた作品の中から審査員の先生方の選考により選ばれました句を掲載します。



●一般の部

大賞

立礼の一服あまし風知草
西尾市 三矢らく子

特別賞

無我苑の廂が好きで雀の子
碧南市 井原 知子

暮蛙鳴いて坂口安吾論
碧南市 小笠原掬江

我が齢妻の齢や白菖蒲
碧南市 平松 邦芳

無我苑の筍皮を脱ぎ捨てに
高浜市 川角 和

瞑想回廊素通りしたる蝸牛
安城市 長田フサエ

あめんぼの恋の季節は終りしか
碧南市 鈴木 照子

菖蒲揺れお巡りさんの笑顔かな
碧南市 服部 喜子

花菖蒲咲く順番を待ちにけり
安城市 植村 清

汗引いてくる立礼の茶席かな
西尾市 渡辺百合子

●小中学生の部

大賞

花しようぶ今年も会えたねこんにちは
日進小四年 杉浦 蒼

特別賞

ひとりじめしたいともだちゆすらうめ
西尾市鶴城小一年 野口 大斗

はなしようぶきれいなはなのおんがくだ
中央小二年 鍋田 百音

花しようぶはちみつマーヤとんでいる
西端小三年 岩坂愛弥乃

かたつむりきみにききたいことがある
西尾市三和小五年 竹中 秀太

花しようぶみんなちがってみんないい
中央小五年 青山 萌子

花しようぶゆらゆらゆれておでむかえ
日進小三年 山本 萌奈

おかあさん花しようぶつてきれいだね
大浜小二年 岡田 航

艶やかに故郷色どる花菖蒲
中央小三年 竹内あかね

哲学の小径を歩けば哲学者
中央小五年 高松 巧伎



伊藤証信の遺品

中村久子書

「唯念仏あるのみ」



中村久子（なかむらひさこ）

一八九七〜一九六八

生い立ち

明治三十年（一八九七）、岐阜県大野郡高山町（現在の高山市）に、父、釜鳴（かまなり）栄太郎、母、あやの長女として生まれる。三歳の頃、凍傷がもとで突発性脱疽（だっそ）（肉が焼け、骨が腐る病氣）にかかり、両手首と、左足はふくらはぎから、右足は踵から切断された。幼くして父親を亡くし、孤児院に送られた弟と離れ離れの生活となる。母の厳しい躰（しつけ）の下、不断の努力を重ね、口で裁縫ができるようになる。また、髪を結うことを除いて、ほとんどの身の周りのことを独力でできるようになった。

二十歳のとき、生きるために見世物小屋の芸人になる決意をする。芸名は「だるま娘」であった。口で字を書いたり、裁縫をしたりするのを芸とした。興行師から久子を見世物芸人にするように勧められても、「貧乏はしていても、わが子を食い物にしない」と断り続けた父親の姿を聞いて育った久子は、自ら決断をくだすまで悩み苦しんだ。

全国を巡業する生活を続けながら、結婚し三女を授かるが、弟、母、二人の夫祖母、最愛の娘を立て続けに亡くしてしまふ。

伊藤あさ子、証信との出会い

昭和九年（一九三四）四月半ば、愛知県西端（現在の碧南市西端）の蓮如上人

法要で興行を打っていたある日、伊藤証信夫人のあさ子と出会う。あさ子は久子の芸を見て、ぼろぼろと涙をこぼしたという。翌日、あさ子は久子を訪ねた。この出会いをきっかけにして、あさ子と証信は友人知人に呼びかけ、久子のために後援会を設立した。この後援会の紹介で、久子は自らの体験を東京の学校、婦人会、母の会などで講演して回るようになった。この後援会は後日、久子自身の願いから解散したが、久子と伊藤夫妻との交友は生涯続いた。久子は何度も無我苑を訪れ、あさ子と一緒に入浴するほどの仲であったという。

久子には、「人間の本当の生き方とは何か」という求道心があった。後に久子はその思想の拠りどころを親鸞の『歎異抄』に求めるようになるが、証信、あさ子の実践する「無我愛」との出会いが、当時の彼女にとって精神的な拠りどころとなり、永く生活してきた興行界を去る決心を起こさせた。

写真の掛軸には「久子書 六十九才」と書かれており、昭和四十年（一九六五）に書かれたものと思われる。

参考文献

中村久子、『こころの手足』、春秋社
黒瀬昇次郎、『中村久子の生涯』、致知出版社

お知らせ

哲学たいけん村無我苑 名誉村長特別講演会

演題

「環境問題と哲学」

講師 梅原 猛 氏

（哲学者、国際日本文化研究センター顧問、碧南市哲学たいけん村無我苑名誉村長）

▽日時 平成二十年十二月七日（日）
午後二時〜

開場は午後一時三十分から

▽会場 碧南市芸術文化ホール
エメラルドホール

▽定員 四百名（先着順）

▽入場料 無料（入場整理券が必要）

入場整理券は、哲学たいけん村無我苑をはじめ碧南市内公共施設で配布中。整理券がなくなりしだい終了とさせていただきます。

▽お問合せ

碧南市哲学たいけん村無我苑
電話 〇五六六・四一・八五二二